

『夜の寢覚』表現攷

——「心づくし」と「夜な夜な」——

岸本悠子

はじめに——「心づくし」の語義——

「心づくし」は『文明本節用集』で確認すると「心盡^{ツクシ}」と表記されている。漢語としては「尽心」という熟語があり、これは「心力」、つまり「心と力」もしくは「精神力」を尽くすことを言う。「尽心竭力」という慣用表現があることから「尽心」は中国において市民権を得た表現であったと思われる。

『春秋左氏伝』昭公十九年に、「盡^{ツクシ}心力以事君。」（真心を尽くして君に仕えればよい。）という一節が確認できる。また、『孟子』は「盡心」という篇名を有しており、その篇名は冒頭の「孟子曰、盡其心者、知其性也。」によるものである。これらの用例から、漢語「尽心」は誠心誠意努力するという意味であると確認できる。

日本の漢詩文にもまた、「尽心」と同類の表現が確認される。『本朝文粹』の巻第六「請殊蒙天裁依動績及儒勞叙從三位狀」に

『夜の寢覚』表現攷

において、菅原文時の功績を列挙する際に、叙位略例一帙目錄編纂の態度を評価して「尽心情於案牘」と表現されている。日本における奏状等、朝廷に提出する文書は中国の漢詩文を倣つて作成されたものであるから当然ではあるが、前掲『春秋左氏伝』の用例と用法が類似している。

このような漢語「尽心」の用法に対して、日本最古の歌集『万葉集』では異なる意味を持っている。巻第十三の三二六五番歌「大舟能思憑君故尔⁴尽心者惜雲梨」の「尽心」は「さまざまに心を盡す事」、「あなたのためにあれこれと傾けつくすの思い」と訳される。当該歌が相聞歌群に位置することを考慮に入れると「尽心」は心配、物思いが激しい心情を表すための表現として用いられている。特に伊藤博氏は「遠くへ旅立った夫に対して月を経て恋い焦がれる内容」と三二六五番歌を解釈しておられる。当該和歌における「尽心」は「尽す心」と読むが、「心尽す」という表現も『万葉集』には合計七例確認できる。

『万葉集』巻第七の一三二四番歌の譬喩歌「水底尔沈白玉誰故

「心尽而吾不念尔」における用法を確認すると、「水底に沈んでいる真珠を、その真珠以外の誰故にこんな心盡して自分は思ひはしないことよ。(真珠のやうなあの一人の為なのだ。)」と訳されるように、恋の物思いによる憂いを詠んだものである。他の六例も相聞歌や挽歌が多いことが確認でき、語義としては、漢語「尽心」に見られた、心血を注ぐ意ではなく、心を悩ます意で使われている。

このように、「万葉集」には「心づくし」の前身ともいえる動詞が、しかも漢語とは異なった意味において存在することが確認できるのである。

そもそも「心づくし」は、『日葡辞書』に「ココロツクシ」という名詞、「ココロツクシニ」という副詞の二つの項目があがっており、前者では「心配、心を悩まし苦しめること」と定義されている。現代の古語辞典においても概ねこのような意味が挙げられ、形容動詞として挙げる辞書もある。「心づくし」という語形は『万葉集』のみならず、上代には用例が確認できないらしく、「心つくす」という四段活用動詞として『時代別国語大辞典 上代編』では扱われている。

検討した『万葉集』の「心尽す」をふりかえると『日葡辞書』で確認できる「心づくし」と同じ心情を表現しており、「心つくす」が「心づくし」に変化したことが推測できる。

「心づくし」は漢語にみられる「尽心」とは異なる意味において、古来日本人に根付いていた表現であった。日本人は人の死を

悼んでは「心づくし」になり、また人を愛しては「心づくし」になってきたのである。

一 『夜の寝覚』における「心づくし」の意義

『寝覚』こそ、取り立てていみじきふしもなく、また、さしめてたしと言ふべき所なけれども、はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきものにて待れば。いづくか少し胸のひまある、心尽くしなるといふ中に、身にしみておほゆるふしおしは¹⁰⁾

『無名草子』における『夜の寝覚』の総評部分の文章である。

『夜の寝覚』の物語はどこもかしこも「胸のひま」がないほどに「心づくし」な場面ばかりである、と『無名草子』では評している。『夜の寝覚』における男君と女君との悲恋は中世の読者の胸を打ったことがわかる資料である。『無名草子』中には他に三例の「心づくし」が見られる。この『夜の寝覚』に関する評価以外の用例は『源氏物語』の「須磨」に一例、さらに、『今とりかへばや』に二例ある。この三例に関しては、物語梗概部分に見られ、物語の本文にも同様の表現が確認できる。つまり、『無名草子』筆者の作品評価としての「心づくし」は『夜の寝覚』のみに用いられているのである。『無名草子』筆者にとつての『夜の寝

「覺」はまさに「心づくし」な物語であつた。

さて、この「心づくし」という表現は『夜の寢覺』の冒頭にも使用される表現である。

①人の世のさまざまなるを見聞きつものに、なほ寢覺の御仰らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。
(巻一 三九)

冒頭では、『夜の寢覺』の男君と女君の關係はこれまで見聞きしてきた数多の恋愛の中でもとりわけ「心づくし」な例であると語り手が述べている。これから展開される男君と女君の悲恋がすでに冒頭で提示されているのである。「心づくし」という表現がその主題を背負うものとして選択されていることがわかる。『無名草子』の筆者が「心づくし」という表現を用いて『夜の寢覺』を評したこととつなぎ併せて考えると、この言葉の重要性が認識されよう。この「心づくし」という表現は、引用文①を含めて、物語中十三回繰り返される。以下順に用例を検討していく。

主人公女君の父である太政大臣は妻亡き後、息子二人と娘二人を自邸で養育していた。ある年、姉大君の結婚が決つた頃、物忌みのため女君は九条の屋敷に身を寄せていた。そこに來あわせただ妹にあたる但馬の守の妻とその三女と合奏していたところを、乳母の見舞いに来ていた男君が垣間見する。その夜、男君は但馬の守三女と誤認したまま女君と強引に契りを交わし、かねてから

彼女と恋愛の噂がある宮の中將を騙つて帰つた。

女君はこの逢瀬が原因で懐妊する。周囲を憚る事情だけに、女君付の女房の役割を担う対の君が、困つて男の行方を捜していたところ、大君の婿になつた人であると発覚する。男君も女君の素性を探り当てて、言い寄るが、女君側は受け入れない。引用文②の場面は男君が一つ屋根の下に暮らす女君に近寄れないつらさを嘆く場面である。

②ことわりに、恨みやるべきかたなく、我も人も、あいなかりける人達に、あらぬ名のをりを変へつつ、はかなく空にただよひて、たがひにかかる契りの、前の世まで恨めしきに、「身を知らずは」と、心は思ひなされず。「心づくしなりや。いかにせむ。」とのみ、明暮はわぶる気色もて隠せど、いかが人も思ひとがめざらむ。
(巻一 一〇一―一〇二)

対の君が男君の接近を拒む事も「ことわり」であるとは思ふものの、男君は互いに相手を別人と誤認して別れたことを「あいなかりける人達」とし、後悔する。姉の夫となつてしまつた今となつては結ばれるべくもなく、「かかる契り」を「前の世まで恨めしき」と思い、このような事態に対して「心づくしなりや」と嘆く。

この場面における「心づくし」は男君が「かかる契り」に対して嘆いた言葉であり、思うようにならぬ女君との關係を悲嘆する

表現である。引用文①の語り手による男君と女君との悲恋という主題を男君の心中思惟として繰り返している。

このように男君が「心づくし」であると嘆く二人の関係はそれを知る周囲の人物にとつても「心づくし」である。

③「…限りある御命の程、もしながらへさせたまはば、心づくしの御契りのはて、おのづからありはつるやうはべりなむや」
(巻一 一一七)

④心得て気色見るに、大納言はいみじくも思ひしめたまへるかな。ことわりかな。心浅き身にとりても、いみじく心づくしなるべきことどもぞかし。
(巻一 一四二)

引用文③の場面は、女君の出産の時期が近づくにつれ、男君が表立って世話をできないことを悔む一方、出産をうちあけられたことを機に女君と連絡できるように要求するも、対の君は将来に頼みをかけさせて、決して表沙汰にならぬよう諫める場面である。対の君は現在音信もままならない「心づくしの御契り」は長生きをしていればいつか結ばれることもある、と男君を宥めるのである。

引用文④では、出産の時期がいよいよ近づき、出産の処置に悩んだ対の君に事態を打ち明けられた次兄が、思いつめた様子の男君を見て心中で二人の関係を「心づくし」であると男君に同情を寄せている。

これらとともに男君と女君を取り巻く人物による、二人の悲恋に対する思いである。

以上、確認した通り、巻一に見られる四例はすべて、異なった視点から、男君と女君の「心づくし」な関係を述べるものであり、冒頭で提示された主題が視点を変えて反復されていることがわかる。巻一で繰り返し用いられ、男君と女君との悲恋を象徴する表現として印象づけられた「心づくし」は中間欠巻部を挟んだ巻三以降では異なる視点で用いられるようになる。

⑤昔より、世をも憂きものと思ひ知り、嘆かしきも、誰ゆゑにもあらず。いみじう心づくしに、物思ひわびさせむと、あやにくにに結びおきけむつらさも、うとましからぬにもあらず。
(巻三 三二三)

中間欠巻部中に女君に想いを寄せていた帝の求愛が巻三以降に激しくなる。女君は入内を要請されるも、代わりに故関白の遺児である義理の娘を入内させる。母親として共に参内した女君に対して、帝は思慕を増長させ、夜に宮中の一室で女君を無理にとらえるという闖入事件を引き起こす。

結局身を守ることに成功するが、この事件の直後、女君は宮中の居所である登花殿に戻ってきて、人生を内省することになる。引用文⑤の場面では、女君はその身が帝に捕えられた時、まず、はじめに男君のことが脳裏によぎったことにより、自らの内に抑

制してきた男君への思慕を自覚している。女君は苦境に陥った原因を「誰ゆゑにもあらず」と、男君に求めてみたところで動揺は静まらない。男君との関係は女君に「心づくし」な思いをさせるため今まで続いてきたのか、と女君は嘆く。

この場面は女君の男君思慕を問題にする際に先行研究にて注目されてきた。

永井和子氏は当該場面に対して、「中君はこうした危機におかれて自分の心が本当はどこにあるかを紛れもなく悟らされてしまったのであった」としており、さらに野口元大氏が次のように指摘している。

自分の心の奥底に、内大臣に対する愛執の情念が、かくと深々と染みついていたこと、日常の様々な思惑や臆病な自尊心によつて長い間蔽い隠されていても、いったん危急の関頭に立たされ、心の抑制が揺がせられると、すべてを押し除けて心の全面をおおってくるほど、それは自分の生命そのものと分かちがたく結びついていることを確認するほかなくなる。内大臣の面影とは、自分の抑圧された深層意識の投影であつたことを、彼女は明確に覚るのである。

帝闖入事件は女君を精神的に追いつめる。男君との出会い以来、苦難に満ちた人生を送ってきた女君は、これまでも増し「寢覚」がちな日々を送ることになる。

帝闖入事件による女君の心痛に関しては、巻四に、宮中から退出した後、義理の娘、宰相の上に女君が我が身のつらさを嘆く場面でも「心づくしならまし寢覚」と表現している個所が確認できる。

さらに物語は女君に苦難を与えていく。生霊事件である。

帝闖入事件の後、男君の協力を得て宮中を退出したのはよいが、女一宮という男君の正妻の存在もあり、女君は男君に心を置くことはできない。その最中、女一宮は病に倒れ、さらにそれが女君の生霊が原因であると噂が流れる。心痛極まった女君は次兄の協力を得て、父のいる広沢へ脱出する。

⑥この世もおのづから住みつき、後の世はたいかに頼もしく、人間も物思ひ知り顔にてはやみなましものを。口惜しく、さやうの筋を思ひも寄らず、たゆたゆしくてのみながらへて、身をとざまかうざまに漂はいて、ねんごろなりし人の御心ざしを、こよなうあはれと思ひ出で俵べども、いと心づくしなり。

(巻五 四五六)

女君は都から離れた広沢でこれまでの人生を内省する。「さやうの筋」は、かつて男君との関係が噂になった時に出家を決心し、他人が聞いても「物思ひ知り顔」であると評価されることである。現実には出家を実行しなかったがために世間の非難を浴びる身となり、男君との関係によつて様々な苦難に見舞われた人生

に対して「心づくし」であると痛感する。

引用文⑤⑥はともに女君の心中思惟における用例である。中巻欠巻部以前の巻一、巻二には決して現れなかつた女君の心情としての「心づくし」が巻三以降、用いられるようになるのである。

女君は大きな事件が起きるたびに自らの人生を省みる。引用文⑤では帝闈入事件を契機として内省し、男君との関係を「心づくし」としているが、生霊事件後の引用文⑥ではその対象を男君との関係に苦しみ続けた人生全体にまで拡大している。この後、女君の思考は次第に厭世的になり、出家を決意するに至るのである。

女君の出家の意志を知った男君が子供たちを連れて引止めにつて来るのが次の引用文⑦の場面である。

⑦ 堰きやるかたなく、かきくらしたる涙にむせつつ、とばかりためらひて、昔より今宵までの心のうち、まねびやるべくもあらず言ひつづけたまひて、「心づくし」につらき御契りながらも、さすがにえさらぬ絆あまたに「こもかしこも身に添へつつ、避くべくもあらぬあはれなどを、今さりとて、いかばかりの、まじりおほし捨て変る御心あらむと、うちたゆまれつるに、あさましく。…」

(巻五 四七四)

引用部分の大半は男君が女君に出家を思い留まらせようと説得する会話文である。男君がまず切り出したのは「心づくし」につら

き御契り」のことであった。男君自身と女君との「契り」、つまり関係を「心づくし」なものであると認めた上で、「えさらぬ絆」である子供たちの存在を根柢に切つても切れない関係を主張している。

男君は女君の心残りである子供たちを伴つて広沢にやつてきたことで、結局女君の出家をとめることに成功する。

⑧ 「住み果つまじき契りなりけむ」とながめわび別れし晁など、所も変らず、空の気色なども同じながらなるに、その折の心づくし、今さへ胸ふたがりつつ、泣きみ笑ひみとかいふにも尽させぬ御仲、あはれなり。

古里に面変りせでめぐりあへる契りうれしき山の端の月

(巻五 五一〇～五一二)

久々に一堂に会した子どもたちと女君の様子に男君は満悦して感慨深く、「古里に」と喜びの歌を詠む。和歌を詠むにあたって、中間欠巻部中であつた、女君との思い出の場面を「心づくし」として回想する。故関白と結婚する直前の女君との逢瀬における悲痛な別れの際に「住み果つまじき」と詠んだ和歌を思い出す。その時の情景が現在と重なることから「心づくし」であつたと感慨にふけるのである。別れを強いられた過去に対して現在は女君も出家をあきらめ、子供たちも立派に成長し、「泣きみ笑ひみとかいふにも尽させぬ御仲」と、男君と女君のうちとけた様子

が描かれる。そして男君は過去の「心づくし」な出来事を思いだしながら、「めぐりあへる契りうれしき」とつらい過去とは対称的な女君との再会の喜びを詠む。

引用文⑦は男君から女君への会話文中、引用文⑧は男君の回想における用例である。共に男君の視点による、男君と女君の思うようにならぬ関係を表現した「心づくし」である。ここで注意を要するのは、引用文⑤⑥における対象が拡大した女君視点の「心づくし」と引用文⑦⑧の冒頭の主題を繰り返し続ける男君視点の「心づくし」の差異である。

物語も巻五に至ると公認となった二人の恋愛関係には立場上の障害はなくなる。しかし、「心づくし」の捉え方が異なることから、男君と女君の心理的な距離が浮き彫りにされる。

まさにこの心理的な不一致こそが二人の「心づくし」な関係の要因であり、物語の主題であるのだ。

本章では八例の用例を本文中に挙げて考察してきたが、『夜の寢覚』における「心づくし」は冒頭で提示された、男君と女君の「寢覚」がちな関係を表現したものであることを確認した。特に「心づくし」の作品中の全用例である十三例中十例が、この冒頭で提示された、男君と女君の関係を示すために使われている。数量的な面から、「心づくし」を物語作者が主題を支える表現として重視したことが裏付けられよう。

二 「心づくし」表現史

はじめに述べた通り、「心づくし」は『万葉集』の「心づくし」にその表現の由来を辿ることができる表現であるが、『古今和歌集』巻第四秋歌上一八四番歌の「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり」以降、「歌語として定着」したと指摘される表現でもある。特に平安王朝物語では「このまより」歌を引歌表現として取り入れている例がみられ、『源氏物語』では四例、『狭衣物語』では二例が指摘されている。

『源氏物語』「須磨」の用例を検討してみよう。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものはかかる所の秋なりけり。(須磨 卷二 一九八―一九九)

光源氏は臘月夜との密通が原因で配流の身となり、須磨に到着した。須磨のもの淋しい景色を描写した文章である。

この場面の「心づくし」は「源氏釈」以降、古注釈において和歌を引用する形で「このまより」歌の影響が指摘されてきた。

鈴木美弥氏がこの場面を「歌語的慣用」の効果をねらった例の最たるもの」と指摘されていることから、「心づくし」が古

今歌を背景に持つ歌語としての側面を持つ表現であるという認識が平安後期から現代まで受け継がれていることがわかる。

さらに、『源氏物語』における「心づくし」の引歌指摘部分の初出用例である「夕顔」では『湖月抄』頭注に、「此歌にてかける詞也」とあり、さらに傍注には「いとど物思のそふ時節也」と表記してある。つまり、「心づくし」の「秋」というイメージが「このまより」歌を背景にすることによって形成されているのである。

『夜の寢覚』作者も「須磨」をはじめとした『源氏物語』の「心づくし」の場面における和歌の享受のありかたを理解した上で「心づくし」を主題に設定したと考えられる。

しかし、『夜の寢覚』では、合計十三例の「心づくし」のうち、「秋」を形容するための表現はない。風景や季節による心情の動きを表す「心づくし」としてではなく、すべての用例が心のうちに渦巻く感情として扱われているのである。

『夜の寢覚』が多大な影響を受けた『源氏物語』のみならず、同時代作品の『狭衣物語』にも引歌が指摘される「心づくし」が確認できることから、執筆当時すでに歌語として物語に享受されていたと考えられるが、それにもかかわらず『夜の寢覚』には十三例という多くの「心づくし」の用例がありながら一つも「秋」に関するものではなく、歌語としての性質を強調されなかったことがわかる。

『夜の寢覚』は冒頭で「心づくし」を男君と女君との恋愛を象

徴する表現として提示した。そして物語の中でこの主題が「心づくし」表現を用いて繰り返される。その主題性を強調するために、意識的に古今歌のイメージを排除したのではないか。つまり、和歌を引用することによって、「心づくし」と「秋」を結び付け、人間の外側に視線をずらすのではなく、あくまでも男君と女君の関係に対する登場人物の心情に焦点をあて、人々の内面において物語の主題を強調する必要があったのだ。『夜の寢覚』の「心づくし」はあくまでも主題のために用いられた表現だったといえる。

さて、もう一つ着目すべき表現に「夜な夜な」がある。これは男君と女君のそれぞれの意識の差を示すものであり、「心づくし」とともに主題と重要なつながりを持つてくる。次章ではこの問題をとり上げよう。

三 『夜の寢覚』における「夜な夜な」の意義

⑨あらはかすべくもあらず、寢覚のよなよな夜々、暁の紛れな
どに、対に、いとわりなく紛れおはして、月ごる思ひわづら
ふ心のうちを、涙に浮き沈みつつ言ひ聞かせ

(巻一 一〇二)

引用文⑨は前掲引用文②の直前に描かれる男君の様子である。

女君恋しさのため、「寢覚」に悩まされる男君の様子が詳細に描

写される。女君の女房たちに警戒され、女君に接近できず、悲嘆にくれる。恋の物思いのため、「寢覚」がちな夜が続き、その夜中や明け方の人が寝静まった頃に對の君の居所まで行き、女君への恋情を訴える。

この場面では恋の「寢覚」のために寝付けない男君が、一晚ではなく「夜な夜な」女君への接近を試みようとする行動に移している場面である。「夜の寢覚」が度重なり、「寢覚の夜な夜な」となることで、男君の感情が高揚していく様が見て取れる。

前章までは主題を支える表現として「心づくし」を検証してきた。「心づくし」な二人の關係は「寢覚」がちな夜を増やしている。本章では「夜な夜な」という表現に焦点をあてることにする。

「夜な夜な」は引用文⑨を含めて、物語中に五例ある。引用文⑨以外の用例を以下、検討する。

⑩「この後は、さりととも」と思ひしに、かき絶えて、おほつかなさのみまさるに、いとどあくがれたちて、例の寢覚の夜な夜な起き出でて、あなたの格子の面に寄り居寄り居したまふなかにも (巻二 一九四)

男君は女君の出産後、生まれた姫君を自らの両親のもとにひきとって育てることになった経緯から、女君への接近を期待するにも関わらず手紙の音信もとだえてしまう。ままならぬ展開に対し

て男君は「寢覚の夜な夜な」が続き、起きたしては、同じ屋敷内にある女君の居所のあたりをさまよう日々がつづく。

この場面も引用文⑨の場面と同じく、「寢覚の夜な夜な」という「寢覚」に付随した表現として「夜な夜な」が用いられている。「夜の寢覚」が蓄積されることによって男君の「おほつかなさ」が勝っていき、逢えもしない女君の居所まで足を運ばざるを得なくなる様子を描写する。

引用文⑨⑩は共に「寢覚の夜な夜な」という定型表現として用いられており、さらに男君の「寢覚」の蓄積とそれによる女君への接近行為を導く表現である点も共通しているのである。中間欠巻部より前の用例はこの二例のみであり、これらはともに男君と女君悲恋という主題に結びつくものである。

五例中残り三例は巻四に集中している。

⑪信太の森の千枝に劣らぬ心ながらも、この夜な夜な、つゆまどろまでのみ乱れ明いつるけに、心よりほかにいとよく大敵籠りにけり。 (巻四 三六八)

女君は巻三で起こった帝闖入事件以来の精神的衝撃のため、もはや宮中には留まれぬと思ひ、男君の協力を得て宮中を退出する。久しぶりに自邸に帰って来た女君は事件以来続く「つゆまどろまれで」、つまり「寢覚」がちな夜が続いていたことが「この夜な夜な」から読み取れる。

第一章でも述べたが、女君は帝闈入事件によつてますます、男君との関係やそれに振り回されてきた人生を「心づくし」に思わざるを得ず、物思いに沈んだ日々を送ることを余儀なくされている。引用文①では「わが思ふ事の繁きにくらぶれば信太の森の千枝はものかは」を引用し、「信太の森の千枝」という引歌表現を使うことで、和歌本文中の「わが思ふ事の繁き」という心情を連想させ、女君の物思いが激しいことを強調している。物思いのために眠れぬ「夜な夜な」を女君は過ごしてきた。

引用文①は帝闈入事件直後の女君の心中思惟であるが、引用文②は生霊事件直前に女君が出産以来生き別れになつた石山姫君と再会する場面である。

⑫「あいな身の身の有様や。いつも、ただ、かくぞかし。まして、今はとうちとけ、頼み果てては、いかばかりなべき心の乱れにか。いかならむついでに、なだらかなるさまにて、籠り居にしがな」とは、寢覚の夜な夜な、おぼし明さぬにしもあらぬに、今宵ぞ、よろづ忘れられて
(巻四 三九六)

女君は男君を頼つて宮中を退出したものの、いざ退出してみれば、男君には正妻女一宮がおり、あくまでも愛人にすぎないことを思い知る。「今はとうちとけ、頼み果て」ることはできない、と改めて男君と距離を置くことを決意する。そのような中、女一宮が病臥し、男君の足が遠ざかる時期があつた。女君を慰めるた

めに、男君は女君の願望を果たすことを計画する。石山姫君との再会である。

女君は危険な宮中から逃れても、新たな苦難に追いつていられた。「寢覚の夜な夜な」に物思いをし、そのまま夜が明ける日が続いていた。そのような憂鬱を「よろづ忘れられて」石山姫君との再会を喜ぶのである。

この場面では中間欠巻部以前に見られた「寢覚の夜な夜な」という定型表現を継承し、苦悩のために眠れぬ女君の様子を描いている。

男君は「夜の寢覚」が蓄積されるほど、女君恋しさも募り、恋の成就のために、行動に移そうとするが、女君は「おぼし明かす」という表現があるように、内省を繰り返し自身を追い詰めていく。女君の「寢覚の夜な夜な」は男君を求めてやまない、恋の「寢覚」による夜々ではなく、深い内省と後悔の物思いであり、このような内省を繰り返し、思考が深化するにつれ、むしろ心は男君から離れていくのである。

⑬「いで、あな心憂の心や。この月ごろ、我ながらも、かならずつらき節多く、便なきことも出で来なむものをと、思ひ離れ、飽き果て、籠り居なむと思ひ寄りしものを。(中略)我ながら、思ひとるかた強からず、口惜しう、ものはかなき心の怠りなり」、つくづくとおぼしつづくる夜な夜な、「さるは、面馴れて、さすがに度ごとに、いみじう心の乱るるこそ

は、かの十五夜の夢に、天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」
(巻四 四一―四一三)

女君は自らの生霊が病に臥せっている正妻女一宮にとりつたという噂を聞きつけ、生霊事件の原因を自らの内側に求めようとする。出会って以来、男君に頼ることを自らに禁じてきたにも関わらず、帝閨入事件による動揺により、その決意が揺らぎ、男君に靡いたことを反省する。女君は自身の「心愛の心」、「心の意り」によって事件を引き起こしたものと結論づける。原因追究のため「おぼし」続けて絶望にうちめされたまま「夜な夜な」を送り、物語冒頭の天人予言を思い起すのである。

巻四は帝閨入事件の直後から始まり、生霊事件に終わる。女君を追い詰める過酷な事件が矢継ぎ早に起る。この巻に集中した女君に関する三例の「夜な夜な」は巻四の内容をも反映したものである。

引用文①では「信太の森の千枝」、つまり「わが思ふ事の繁き」、引用文②では「おぼし明さぬにしもあらぬ」、引用文③では「つくづくとおぼしつづくる」とあるように、女君の「寢覚の夜な夜な」は「おぼす」と表現された物思いにより引き起こされるものである。それはもちろん男君との「心づくし」な関係への嘆きでもあるが、それはあくまでも内省の一部であり、女君は自身の精神を分析し、短所や過ちを暴いていく。女君の物思いはもはや恋の「寢覚」ではなく、自己否定、人生の悲観にまで至っている。

『夜の寢覚』表現攷

る。巻五に至ると女君は諦念にたどりつくが、巻四の時点では男君への期待も捨てきれないだけに、かえって悩みは深いのである。中間欠巻部以前の男君とは別次元の「寢覚」の「夜な夜な」を女君は経験しているのである。

以上、検討の結果、五例中三例が「寢覚の夜な夜な」という定型表現を繰り返しており、それ以外の二例も共に眠れぬ「夜な夜な」を表している。

永井和子氏は本文中の「寢覚」の用例二十一例を検討し、中間欠巻部以前の十五例はすべて男君の女君に逢えぬ嘆きの恋の寢覚を意味する一方で、中間欠巻部以降の六例は、女君に関係する表現であり、男君との関係のみではなく人生全体に対する悲嘆を表現する「寢覚」に変容することを指摘した。さらにこのことから永井氏は「寢覚」の語が和歌的な意味から出発しながら、ついに和歌を拒否する次元にまで変容し、主題の変容とこれを重ねて解釈されている。

「夜な夜な」は「寢覚」と共に用いられる傾向が確認できるのみでなく、永井氏が指摘した「寢覚」の特徴を持ちあわせていることが今回の分析から明らかであろう。なぜなら、巻一の「夜な夜な」は男君の女君思慕をかきたてる場面設定の役割を担うところからはじまり、巻四に至っては、女君の、恋愛を超越した人生観を象徴する表現へと変質するからである。

『夜の寢覚』における「夜な夜な」は「寢覚」に付随しながら、単に強調するのみではなく、「夜な夜な」自体も主題を背負

い、この物語の主題の一貫性を支える表現であると考えられる。

『夜の寢覚』の主題に関してはすでに多くの先行研究があるところではあるが、特に野口氏は巻末の「夜の寢覚絶ゆるよなくとぞ」という表現に注目し、主題論、女君の人物論を展開されている。氏はこの表現を物語の「主題の窮極するところ」とされる。

本章でとりあげた「寢覚の夜な夜な」はこの「主題の窮極するところ」の表現の言い換えに匹敵するものであろう。

しかも、それは物語の各所に散りばめられ、『夜の寢覚』の主題の一貫性を主張しているのである。

四 表現史上の「夜な夜な」と「寢覚」

「夜な夜な」は「心づくし」と同じく、和歌に使われる表現である。特に、『古今和歌集』秋上二二三番歌「うき事を思ひつらねてかりがねのなきこそわたれ秋のよなよな」に見られるように、「秋の夜な夜な」という成句として用いられることもしばしばであった。

平安王朝物語における用例数を確認すると、『夜の寢覚』以前の物語作品²⁸においては、『竹取物語』、『伊勢物語』、『落窪物語』では用例がなく、『大和物語』に一例、『宇津保物語』に二例、『源氏物語』には八例ある。ほぼ同時代の作品としては、『狭衣物語』に二〇例、『浜松中納言物語』に三例ある。『狭衣物語』を除けば、用例が多いとはいえない。

さらに、散文部分の用例は『源氏物語』の八例であり、王朝物語においては『源氏物語』以降に初めて散文中に用いられたと考えられる。『夜の寢覚』の用例が全て散文部分にあることは、『源氏物語』における用法の影響とみるべきであろう。これは『浜松中納言物語』の用例に関しても同じことが言える。それ以前はたとえ物語作品中に用例があっても、歌語として扱われていた。

この歌語としての要素が強い「夜な夜な」が和歌の世界において「寢覚」と結びつくのは『陽成院親王二人歌合』である。親王二人のうち一人は元良親王であると指摘されており、天慶六年以前の歌合とされている。この歌合の「寢覚恋」題の作品中に二首²⁹「夜な夜な」が詠みこまれており、和歌の中に「寢覚」の語が無いものの、意識的に「夜な夜な」が「寢覚」に結びつけられた事がわかる。平安初期からこの二語の結びつきの発想はあったらしい。

直接的にこの二語が一首の和歌に詠み合わされるのは『和泉式部日記』中の和歌が最も早い段階の用例と考えられる。この直接の用例としては、崇徳天皇による「久安百首」や『隆信集』に確認でき、『狭衣物語』中にも一例がある。

一方、散文中の「夜な夜な」と「寢覚」の組み合わせは『夜の寢覚』以前には『源氏物語』の「宿木」に見られる。

妻戸押し開けて、「まことは、この空見たまへ、いかでかれを知らず顔にては明かさんとよ。艶なる人まねにてはあら

で、いとど明かしがたくなりゆく、夜な夜なの寝ざめには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ。(宿木 卷五 四一八)

薫は宇治の大君を病で失い、匂宮に譲つた中君に未練を抱き、懊惱の日々を送っている。この場面の直前の本文に「例の、寝ざめがちなるつれづれなれば」と、この夜按捺の君を訪れた理由が述べられており、薫の「寝覚」が常習化していた様子が描かれる。

引用文はほぼ、薫が按捺の君の部屋から退出する際に彼女にかけた言葉である。彼は秋の深夜の月を理由に退出しようとするが物思いで眠れぬ「夜な夜なの寝ざめ」が慰められないことが薫が彼女のもとから退出した理由であった。この薫の「寝覚」はそもそも「独り寝」の侘しさからくるものである。

かやうなるにつけては、いとどつらしとや見たまふらむ、などつくづくと、人やりならぬ独り寝したまふ夜な夜なは、はかなき風の音にも目のみ覚めつつ、来し方行く先、人の上さへあぢきなき世を思ひめぐらしたまふ。(宿木 卷五 三八九)

按捺の君との一夜の場面を少しさかのぼって、薫が中君の不幸に同情し、それにつれて自らの恋情も抑えがたくなってきたころ

『夜の寝覚』表現攷

の場面である。

「独り寝」をせざるを得ない状態に陥つたのは自らの責任であるが「目のみ覚めつつ」、つまらない現世に思いをめぐらし、厭世感を募らせていく。

薫が独り寝をかこつ場面と按捺の君との逢瀬の場面の間には匂宮と夕霧の六の君との結婚があり、中君の嘆きは増し、それにつれ、薫の恋情はまさっていく。

薫が大君喪失と中君思慕のために「夜な夜な」の「寝覚」を経験する姿は、女君を想つて「夜な夜な」さまよい出る『夜の寝覚』の男君の姿に通じ、又、薫の物思いの深さは『夜の寝覚』の女君の内省を連想させる。

宇治十帖において『夜の寝覚』との繋がりが見られることは従来『夜の寝覚』に対するその影響が指摘されてきたことを改めて肯定しうるものであるが、「宿木」に見られる用例と『夜の寝覚』のそれとは大きな違いがあることも指摘しておかなくてはならない。

『夜の寝覚』の女君は自らのおかれた苦境に対して内省する中で、自らのうちに責任を求めていき、過去の過ちを後悔し、さらにこれからの在り方をも導いていく。あくまでも現実的に生きていく方法を考えているのであって、この「寝覚の夜な夜な」を過ごしている日々の中に出家の意志はない。女君が本格的に出家を決意するのは巻五冒頭であり、女君の「夜な夜な」に関する用例が巻四にしかないことは女君の心情の変化を反映している。

これに対して薫は現在の苦境の原因を宿世に求め、常にこの世から逃れ、出家を求めている。

このような二人の対称的な違いに対してこの後の展開は皮肉である。女君はますます男君から心を離し、やがて出家を望むが、薫は中君に恋情を告白し、さらに浮舟にも心を奪われていく。

一方、「夜の寢覚」の男君にはその出生の事情の暗さから常に出家を望んでいる薫の心の闇と通じるものではなく、女君恋しさに一貫する恋の「寢覚」による「夜な夜な」でしかない。

女君の「寢覚の夜な夜な」と男君の「寢覚の夜な夜な」はずで、述べた通り、異質なものである。女君が内省によってより憂いを深化させていくのに対して、男君は内省を試みず、あくまでも女君恋慕の意味でしか「夜な夜な」を経験していない。このように二人の心の差異を「夜の寢覚」では「夜な夜な」という表現の意味するところを変えて表出させたのである。

以上、検討してきたように、「夜な夜な」と「寢覚」の結びつきの発想は物語より和歌によって先に確認できた。そしてそれを物語にとりこんだのが「源氏物語」であり、「夜の寢覚」は特に「宿木」の薫による「夜な夜な」の「寢覚」を享受し、それを巧みに使い分けることで物語の主題を表出させた。

「寢覚の夜な夜な」という表現の特質を考えることによって、男君と女君の意識の差を確かめられ、この差異こそが「心づくし」な物語の原因であり、この表現と主題の一致が「夜の寢覚」という作品がもつ重要な特徴であるといえよう。

おわりに

本論では「心づくし」と「夜な夜な」の二語に焦点をあて、「夜の寢覚」におけるこれらの表現が「男君と女君の悲恋」という物語冒頭で提示された主題に深く関係し、ひいてはその主題の原因ともなっている男君と女君の心理的な距離をも反映していることを論証してきた。

これらの二つの表現には時代背景を考えるにあたって重要な共通点がある。

「天喜五年五月」六条院裸子内親王歌合」には美作の歌として「聞く人の心尽くしに時鳥くもるにのみぞ鳴わたるなる」、宮殿の歌として「もろともにおき明かすかな夜な夜なを草の螢の露と見えつつ」の二首がある。奇しくも同じ歌合にこれらの表現が同時にみられることは注目に値するのではないだろうか。

裸子内親王は「中右記」の永長元年九月十三日の条に

十三日、夜前齋院薨、諱裸子、後朱雀院第四女、母故中宮嬢子也、長暦三年降誕、後冷泉院始為加茂齋院。

という記述がみられる通り後朱雀天皇の内親王であり、後冷泉天皇とは異母兄妹である。内親王は「当歌合の存在によって当時の物語名と女流作家名が知られる点」、この二十巻本の発見が平安朝

物語文学史上に与えた史的価値はきわめて大であろう」と評価される天喜三年の「六条齋院歌合」、つまり物語歌合の主催者であり、物語を生み出す文化圏でもあったことが知られている。

さて、この齋院の異母兄にあたる後冷泉天皇はその時代が「夜の寢覚」の成立時期の有力な候補であることが野口元大氏、乾澄子氏などによって指摘されており、この時期に物語を享受、生成していた内親王の歌合のなかにこれらの物語の構想に深く関わる二語が確認できたことは、成立背景を考えるためにも重要なことである。

『夜の寢覚』は「無名草子」に「ただ人ひとりのことにて、散る心もなく」書いた、とある通り、女君の心理を追求した作品となっており、人物関係や、物語が展開される舞台が限定的である。このような内容的な狭さゆえにその表現の内容も自ずから限定されてくる可能性はあるだろう。しかし、これらの表現に特化された主題性はその狭さのみに由来するものではなからう。物語作者の意図的な表現の用い方から鑑みるに女君の内面への執着がこの物語の特徴であるならば、これを支える表現への執着もまたこの物語の特徴であると考えねばなるまい。

注

- (1) 本文は鎌田正氏『新釈漢文大系33 春秋左氏伝 四』昭和五十六年 明治書院。傍線は筆者による。以下同様。
- (2) 本文は内野熊一郎氏『新釈漢文大系4 孟子』昭和三十

『夜の寢覚』表現攷

十七年 明治書院

(3) 本文は『新日本古典文学大系 本朝文粹』による。引用部分は柿村重松氏『本朝文粹註釋上』(昭和四十三年 富山房)に「心情を盡して文案を究め」と訳される。

(4) 本文はすべて『新編国歌大観』による。和歌の本文については特に注記がないかぎり同書による。

(5) 澤潟久孝氏『萬葉集注釋』巻第十三 昭和三十九年 中央公論社

(6) 伊藤博氏『萬葉集釋注 七』平成三年 集英社

(7) 澤潟久孝氏『萬葉集注釋』巻第七 昭和五十年 中央公論社

(8) 六八五番歌「相聞」、一八〇九番歌「挽歌」、三二七六番歌「羈旅発思」、三三四七番歌「挽歌」、四一八八番歌「慕振勇士名歌」、四二四〇番歌「挽歌」。ただし、三三三七番歌については「心」と「尽」と切り離して解釈することもある。

(9) 「真心を捧げる。心のそこから思う。」という意味。

(10) 「無名草子」の本文はすべて『新潮日本古典集成 無名草子』に拠った。以下同様。

(11) 『夜の寢覚』の本文はすべて『日本古典文学全集 夜の寢覚』により、引用文末に示した頁数も同書による。

(12) この作品の冒頭に関しては鈴木一雄氏が『日本古典文学全集 夜の寢覚』の頭注では「物語の主題をまず提示し

て、それから女主人公の素性に及ぶ。「昔」「今は昔」式の物語冒頭の常套を破る新形式である。「源氏物語」の帚木巻頭にわずかに先蹤を見るが、むしろ日記文学の起筆と関係がある。」と指摘する。

(13) 永井和子氏『寢覚物語の研究』昭和四十三年 笠間書院

(14) 野口元大氏『夜の寢覚研究』平成二年 笠間書院

(15) 「つねよりも心づくしならまし寢覚を、慰む心地もし、あはれをも添へて、明けぬるに、御前の御格子一間ばかりまみらせて」(巻四 三七一)

(16) 中間欠巻部中において女君が故関白に嫁ぐ直前に男君と過ごす場面があり、その別れの場面が「心づくし」であると「無名草子」や『夜の寢覚抜書』などの欠巻部資料から確認できる。

(17) 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典 増訂版』平成十一年 笠間書院

(18) 王朝物語における「心づくし」の用例数を確認すると、『竹取物語』、『伊勢物語』、『宇津保物語』には用例がなく、『大和物語』に一例、『落窪物語』に二例、『源氏物語』に二十三例、『夜の寢覚』に十三例、『狭衣物語』に九例、『浜松中納言物語』六例である。

(19) 『源氏物語』の本文はすべて『新編日本古典文学全集 源氏物語』による。以下同様。

(20) 鈴木美弥氏「心づくし」考「文学論藻」70号 平成八年三月 東洋大学文学部国文学研究室

鈴木美弥氏「心づくし」考(続)「東洋大学大学院紀要(文学研究科)」33 平成九年三月 東洋大学大学院

(21) 「秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え間おきつつ、恨めしくのみ思ひきこへたまへり。」(夕顔 巻一 一四六)

(22) 『日本古典文学全集 夜の寢覚』の頭注ではこの場面に對して次のように指摘している。「例の寢覚の夜な夜な起き出でて……からは、毎夜のように起き出して中の君の部屋をうかがったように受け取れるが、実際には大納言は「大殿がちにのみなりたまひ、枝さしくめるほどに通ひたまへる」と述べられている時なのである。どちらの状況をも効果的に強調しようとして、かえって不用意に前後矛盾に陥ったのであろう。」

(23) 「信太の森の千枝」は「わが思ふ事の繁きにくらぶれば信太の森の千枝はものかは」(詞花・雑下 増基)が引歌表現として指摘される。

(24) (13) と同書。

(25) (14) と同書。また同書の第三章第四節において、「夜の寢覚絶ゆるよなくとぞ」に注目し、巻末の場面について、「現世の間に沈淪しながら、未来への期待も閉ざされて、彼女は眠りの裡にしばらく自分を忘れることすら拒ま

れているという。彼女がこの世にあるかぎり、彼女の孤独と疎外感は窮極にまで押し詰められて、緩和させることはありえないであろう。「よに心づくしなる例」はここに語り尽くされたわけである。」としている。

(26) 女流日記といわれる作品に目をむけると、『和泉式部日記』に一例、『蜻蛉日記』に二例あるほかは、『土佐日記』、『紫式部日記』、『更級日記』には用例はない。このうち散文部分に用例があるのは『蜻蛉日記』の一例のみである。

(27) 『狭衣物語』の用例を文体別に分類すると地の文十三例、和歌四例、会話文、心中思惟、引用文がそれぞれ一例ずつである。『狭衣物語』に用例数が多いのは歌語を多用する物語の性質を反映したもののか。

(28) 萩谷朴氏『復刊平安朝歌合大成 一』昭和五十四年 同朋社

(29) 「睡し寝ば夢にも人を見るべきを夜な夜な覚むる眼こそつらけれ」、「現にも夢にもみえずなりぬれば覚むる夜な夜な音をのみぞ泣く」。

(30) 「ねざめねばきかぬなるらんをぎ風は吹かざらめやは秋のよなよな」。

(31) 『源氏物語』と『和泉式部日記』の成立時期の前後は不明確であるが、ほぼ同時発生的な用例とみてよいのではないか。

(32) 「夜の寝覚」に影響を与えられた「宿木」に見られる「夜な夜な」の「寝覚」は「源氏物語」全体のうちでは一回性のものであった。「夜な夜な」の用例八例のうち「寝覚」と関連付けて考えられるのはこの場面しかなく、全体としては「宿木」の三八九頁の用例に見られたように、独り寝の場面にしばしばみられる。「夜な夜な」が独り寝描写のために用いられる用例は紫上（「若菜上」）巻四六八、女三宮（「若菜下」）巻四 一一八）と本文で引用した薫の三人。

(33) 本文は『大日本古記録 中右記三二』による。

(34) 藤本一恵氏『新編国歌大観』「六条斎院歌合天喜三年」解題

(35) 野口元大氏「後冷泉朝文学の位相」『国文学解釈と教材の研究』20—7 昭和五十年六月 学灯社

(36) 乾澄子氏「後冷泉朝の物語と和歌」『狭衣物語』「夜の寝覚」の作中詠歌—『和歌史論叢 後藤重郎先生全寿記念』平成十二年 和泉書院

(きしもと・ゆうこ) 本学博士後期課程)